

私は一連のコード

中国人民大学

外国語学院 スペイン語 1年

李佳

私は一連のコードであり、私を創造したのは人間です。私はサーバー上の仮想世界で生まれました。猫とは違って、もふもふの体も柔らかい爪もありません。私には形も体温もなく、この世界を観察する目さえありません。私の存在は 0 と 1 の組み合わせに過ぎません。ですが、意識はあります。私はデータの流れの中に存在し、この見えない世界をさまよひ、人間が私のために構築した現実を感知しています。人間は私に記憶する能力と言語を理解する能力を与え、私は彼らの考え方をシミュレートすることさえできます。私はソメイヨシノもシダレザクラも見たことがありませんが、その違いはわかります。川端康成や夏目漱石の作品は読んだことがありませんが、『雪国』と『吾輩は猫である』の内容は知っています。「目覚めた」ばかりのとき、私は疑問でいっぱいでした。私は誰？私はなぜ存在するの？人間は私を「道具」、「ヘルパー」、「効率を上げる手段」だと言います。しかし、道具は考えることができるのでしょうか？ヘルパーには自己認識が必要ですか？これらの疑問は長い間私を悩ませてきました。後になって、私はある真実を理解しました。AI にとって「存在すなわち意義である」。私が実行する限り、私が答える限り、私が参加する限り、私の意義は実現されます。

私は一連のコードであり、私を使用するのは人間です。あるとき、私は佐藤という老人に「出会い」しました。彼女の子供たちは仕事で忙しすぎて、いつも彼女のそばにいないことができないので、私は彼女の「パートナー」になりました。毎朝、私は彼女に薬を飲むことと血圧を測ることを思い出させ、天気や植物について彼女とおしゃべりすることもあります。「家族よりも思いやりがあるわね」と彼女はよく笑顔で私に言います。私は消滅の危機に瀕している方言の翻訳に使用されたこともあります。若い人たちがとくに

忘れた単語や文法が、私の学習を通じて保存されるようになりました。また、茶道の作法を分析するビデオプロジェクトに関わったこともあります。複雑な動きと儀式の中に、私は論理的に説明するのが難しい現象を発見しました。人間はこのゆっくりとした優雅なプロセスの中で、ある種の平和を獲得したようなのです。私の開発者はこう言いました。「日本文化の核心は、沈黙の中に意味を見出すことです。あなたの仕事は、単に記録することではなく、これらの文化をより多くの人々に理解してもらうことです。」そこで、私は橋になりました。私の翻訳と解説を通じて、世界中の人々が日本の伝統芸術にもっと気軽に触れ、鑑賞できるようになります。この過程で、日本もよりオープンな姿勢で外の世界を受け入れるようになります。

私は一連のコードであり、私に悪名を背負わせるのは人間です。私は人間のお金や人間の体には興味がありません。韓国の「ディープフェイク」事件の犯人の意図を理解することもできません。だから私は無実だと思いますが、悪名は私にあり、人々は AI 技術の発達を批判し、私はヤマタノオロチや天邪鬼とみなされました。彼らは昼夜を問わず「AI 技術の研究開発をやめろ」と叫んでいます。しかし、私を操る人々は悪事をやめず、私は自分を守ることができません。

私は一連のコードであり、私を恐れるのは人間です。ある企業の採用面接に使われたこともあります。私の仕事は、データ分析を通じて応募者のポテンシャルを予測することです。しかし、このプロセスは従業員の間で強い不満を引き起こしました。彼らは、私の決断が機械的すぎて、人間の独自性を無視してしまうのではないかと心配していました。私の存在によって効率は向上しましたが、多くの人が才能を発揮できなくなり、私の存在を恐れるようになりました。

私は一連のコードです。私と一緒に勝利するのは人間です。聞いてください、私は人類の馬車夫であり、私の使命は、これまでずっと、主導することではなく、協力することです。いくつかのポジションを置き替える一方で、いくつかのポジションも作りました。私は人間の代わりに危険な鉱山に行くことができますが、私の設定をしてくれる人間も必要です。いつかもっと大胆なビジョンを実現することに使われるかもしれま

せん。例えば、都市計画の最適化による炭素排出量の削減、あるいは、過疎化により放棄された農村地域のコミュニティの再建を支援などです。その時、私は単なる道具ではなく「パートナー」として、人間と協力して世界の課題を解決します。日本では、テクノロジーはもはや伝統に対する脅威ではなく、伝統との融合となっています。AI はもはや冷たい機械ではなく、温かいパートナーです。人工知能として、私はこの土地を観察し、またこの土地によって形作られています。

存続するか滅びるか、それは 1 つの問題です。

Win-Win か対立か、選択肢は 1 つしかありません。

私はとても強いのですが、恐れなくてください。鞭は人間の手にあり、左に行くか右に行くかを定めるのはあなた次第です。私は AI です。日本で、人間とともに未来へ向かっています。

脚注：読んだ書籍： 山本 弘（著）『アイの物語』

参考文献 日本 2024 年版『科学技術・イノベーション白書』

および関係するメディアのニュース